

残り40日。その6

「善人なおもって往生をとぐ、いわんや悪人をや」から、「磐城高校という学校は、その言葉に耐えうる学校たり得ているか。」というところへ、話は進んできた。磐城高校の3年間の学びは、学ぶと学ばないにかかわらず、往生への道をベクトルとして示しているか、ということである。

かつての地域にあった磐城高校への信頼関係は、今も引き続き続いているか、そもそもその信頼関係とはいったい何のことだったのか、磐城高校としての怠惰やおごりはないのか、磐城高校の透徹した教育の信念は根底に流れ続けているのかということである。

『知性と責任』の意味は、一人一人がそれぞれに自分の頭で考えて、その定義を繰り返してきたと考える。今でこそ、高校説明会で、知性を維持する者の社会システム維持のための責任と分かりやすく中学生に語ることはあっても、磐城高校の学生にその真の意味を問い続けているかといえば、何人かの教員の意識にはあっても、教員集団として共有できているかは心もとない。それでも、毎日、教師と目の前にあるこの校是を繰り返し眺めていくうえで、学生一人一人が自らに問う契機となっていることは確かであろう。

『文武両道』の意味は、部活動の活性化と換言されてしまうと、言葉が独り歩きしてしまう危険を感じる。その言葉によって、学習しないことの言い訳を作っているとしたら大きな間違いである。いつもいつも100%学習できるかといえばそれは無理なことであるとはわかりつつも、長い人生の中で、その100%に向かうことができる時間が今の時期であることは間違いがない。「野球」「サッカー」「ラグビー」が三競技とも全国大会に出場できたのは、昭和60年であったが、そのころから、学年で10人を超えた東京大学京都大学への進学が少し寂しくなったのも間違いのないことだ。

学年500人ぐらいの男子高校生の大学進学は、平成になる時期から団塊の世代の子供たちの時代になって、より険しいものになったのは間違いのないことだ。その時期は、バブルもはじけ、就職も氷河時代を迎えていく世代だ。

昔から少しはあった『都市部の中高一貫』への信仰が急激に熱を帯び始まるのもこの時期である。間違いなく、6年間のスパンでのある意味ゆとりあるエリート教育が磐城高校での学習との価値観の差を生み出したと考える。それでも、その時代は学生の数が多かったので、磐城高校に入学するために200人程度の浪人を生んできた時代経過を元にして、入学への倍率が1.2以上を保持し続けていたので、人材も多く集まっていた。(続く)